

調査方法

◆調査校の選定と、その理由

まずは「オープン・スペース」がわが国に導入された後、建築面だけでなく教育面においても改革が行われた時期である1970年代に開校した学校が、現在はどうのような教育活動を行っているのか、そこにオープン・スペースはどのように意味づけられているのかを知るべきであると考え、卯ノ里小学校を取り上げた。

その後80年代からは、オープン・スペースが一種の流行となるかのように上野が指摘する「オープン・スクールの画一化」が起こった。この現状に学校建築計画から更なる改革を起こそうという動きが建築家に見られた。オープン・スクールの画一化を打破すべく、その代表作として開校したで打瀬小学校を次に取り上げた。

もう一校は、開かれた学校づくりが浸透し、生涯学習や地域の教育力を学校教育に導入するなど、学校は「地域の学校」というように、様々な意味でのオープン意識が広まった頃に計画され、打瀬小学校の改善点を補うように計画され開校した博多小学校を取り上げた。学校づくりに行政主導の下、地域住民、保護者、子ども、教師の話し合いを設け意見を取り入れながら計画された学校である。なお、以下保護者も含めて地域住民と記す。

学びの構造転換がおこり、オープン・スペースが本格的に広まりを見せた1970年に移行に開校したオープン・スクールを研究対象とした。

さらに、小学校と中学校とでは学校運営に異なる点があるため、調査によるデータの考察はできないが、学校づくりにプロジェクトにおいて、本研究室が設計段階から関わっており、同時に研究を進めてきた名川中学校もとりあげた。名川中学校は、学校運営を従来型の特別教室型ではなく教科センター方式を導入し、開校した中学校である。運営方式を変更したことで、必然的にオープン・スペースという空間が学校建築の中に導入されることになった。開校してから4年目となり、まだまだ教育実践において試行錯誤を続けている段階である。しかし、中学校も小学校も、教職という同じ分類の職業に属しているため、教職員としてどのようにオープン・スペースを意味づけているのかという意識を知ることが、本研究において1つの指標となると考え、結論において取り上げている。

◆調査対象校の概要						
学校名 (県名)	オープン・スクールとして開校した年	地理的位置	調査時の学校規模 (クラス数) ※特別支援学級は構造上オープンになっていないため、クラス数に含んでいない	学校教育目標	学校建築の主な特徴	特色ある教育活動・方針
東浦町立 卯ノ里小学校 (愛知県)	1979年	愛知県東浦町の西に位置し、緑豊かな自然に囲まれた地域	H20年度 全18クラス (1学年3クラス)	豊かな心を持ち、主体的に行動できる卯ノ里っこの育成	◆多様なオープン・スペースを持つ ①学年オープン・スペース (ワークスペース) ⇒各学年フロアに一定の広さの場所の確保 ②ホール、サンホール ③学習コーナー ⇒特定の学習のために設置されている ④その他、各種コーナー ⇒わくわくルーム、グリーンコーナー、オレンジコーナー	◆開校以来「個別化・個性化教育」の実践・研究を継続 ◆3つの場における特色ある学習活動 ⇒教科学習…個別学習の徹底 (国、算、理において) ⇒総合学習 ⇒集団活動 ◆T・T授業、少人数授業などの支援 教員を効果的に配置(TTカレンダー) ◆多様な人材を導入 ⇒地域・保護者の先生の積極的な導入
千葉市立 打瀬小学校 (千葉県)	1995年	千葉市の西部に位置する国際業務都市(幕張新都心)の隣にある、埋め立てによって生まれた地域	H16年度 全25クラス 1年:(6)2年:(5)3年:(4)5年:(4)6年:(3)	「きらりかがやく子の育み」	◆「クラスセット」を校舎全体に配置⇒個々の教室に1対1に対応しているオープン・スペースではない ◆壁のない職員室 ◆大階段(中学年棟) ◆特別教室など地域開放への対応 ◆外の教室 ◆屋上プール	◆開校時から「総合学習」に取り組む ◆個に応じた課題解決学習を中心として、Tや少人数指導を積極的に実践 ◆外部講師や地域住民などの多様な人材を教育活動に導入
福岡市立 博多小学校 (福岡県)	2001年 (4月に新校舎が完成し移転) ※1998年4月、冷泉、奈良屋、御供所、大浜の4校が統合され、博多小学校として開校している	福岡市の中心部にあり、自然もあり商業も盛んな地域	H20年度 全19クラス (1学年3クラス ※H20年度から1年生は4クラス)	自分を取り巻く「ひと・もの・こと」との絆を大切にしながら、地域と共に歩むことができる「博多っ子」の育成	◆「学年セット」を校舎全体に配置 ◆職員室がない ⇒教室と教室の間に「教師コーナー」を設置 ◆特別教室など地域開放への対応 (図書室、音楽室、ランチルームなどを地域の人々に開放できるように配置) ◆施設の回遊性の確保 (校舎棟、体育館棟、公民館を2階のデッキで結ぶ) ◆外の教室、メディアスペース ◆表現の舞台 ◆メモリアルゾーン (旧4小学校の思い出の品々を保存展示) ◆石畳展示室 (埋蔵文化財の発掘調査で見	◆多様な学習活動の実践に向けて、T・Tや少人数指導も積極的に実践 ◆地元の祭りへの参加により地域文化を継承する「博多っ子」の育成を目指す ◆外部講師や地域住民などの多様な人材を教育活動に導入

◆調査の方法と調査日時

調査の方法としては、～のため、教職員へのヒアリング調査及び観察調査を含む実地調査を行った。また、調査対象校に関連する文書(学校要覧や調査対象校に関する文献講読)を調査することで、実地調査から得られるデータ以外のデータを補った。

実地調査においては、データ収集時のヒアリングにおける漏れを補おうと、了承を得たうえで録音器具を用いて記録した。また、同時に行われた観察調査においても、了承を得たうえでデジタルカメラによる撮影を行い記録した。

◆調査に当たっては、オープン・スクールの教育活動を調査し、そこから教育活動を行う中での教職員によるオープンスペースの意味づけを探ることとする。どのように意味づけられているのかを知るためにはアンケート調査では不十分であると考え、教職員へのヒアリング調査を行った。

同時に、オープンスペースをなぜ導入することになったのか、開校までの経緯についても調査する。この調査には、ヒアリング調査のほか、調査校に関連する既往研究や関連文献の講読を行った。ヒアリング調査は了承を得た上でレコーダーによっても録音された。

さらに、実際にオープンスペースがどのように設えられているのか、その観察のデータは、了承を得た上でデジタルカメラによって記録された。

また、打瀬小学校の実地調査に関しては、本研究室平成18年度卒業論文において調査対象とされており、教育活動の様子を観察し、また教職員へヒアリング調査を行っていることから、そのデータを用いて分析している。

◆実際のしつらえに関しては、ヒアリング調査と同時に行われた観察調査において、デジタルカメラによって記録された。

◆自然な状態で(依頼して使ってもらうのではなく)の学校全体の教育活動を教えてもらう。教職員がどのような考えをもって学習活動を行っているのかヒアリングしながら、その中でOSがどのように捉えられているのかを調査する。同時に、OSはどのように環境構成されているのかについても観察する。そのほか、教育活動に関してだけでなく、学校が抱えている問題点や、教職員が抱えている課題意識など、教職員の生の声を聞くためにヒアリング調査をおこなった。この調査から、オープン・スクールに勤務する教職員のオープンスペースの意味づけを明らかにすることを目的とする。

同時に、開校までのオープンスペースの意味づけを探るために、関連文書からもデータを収集した。開校前までのOSの意味づけと実際の現場教職員の意味づけを結びつける中から、今後のオープン・スペースの可能性、とりわけ、実際に子どもの学びと空間を結びつける役割を持つ教職員に求められることを中心に結論を導くこととする。

実態を明らかにすることを目的とする。

◆その学校がどのような教育を目指し、そこにOSがどのように結び付けられているのかを知るためには、教職員へのアンケート調査では不十分。教員の実際の声が聞かなくてはわからないから、ヒアリングしたよ。

生活科(1992)、総合的な～(2002)は、体験的な学習や個を生かした学習を主としている。各教科学習においては従来の一斉授業の形態がまだまだとられているし、教員自身もその方が行いやすいと感じているのは確かである。しかし、その教科学習においても、OSを結びつけている場面が確認され、教員自身も、OSがあるとやりやすいと感じている。

◆実地調査の概要

学校名	調査日時	データ収集方
卯ノ里小学校	2008年4月28日	ヒアリング調査 観察調査
打瀬小学校	2005年1月26日	ヒアリング調査 観察調査
博多小学校	2008年9月19日	ヒアリング調査 観察調査

